



戦前の卒業生の遺品から

北星学園創立百周年記念館 矢島 あづさ

林竹治郎に美術を学び

昨春秋、北星女学校33回生（1926年卒）沼田智恵さんの娘である畠山廸子さんから、遺品が寄贈されました。

戦前に使われていた英語の教科書、聖書、和英辞典も大変貴重ですが、ひと際目を引いたのは、桜、菜の花、パンジーを描いた一枚の絵画でした。

智恵さんの学生時代のようにを知りたくて、同窓会発行の創立百周年記念文集『星のあゆみ』を読むと、同級生の作文から、当時の美術教諭の一人が、画家の林竹治郎だとわかりました。林竹治郎は、



4年生の美術の授業で描いた絵画

クリスチャン家族の日常を描いた名画「朝の祈り」で知られています。次男の文雄は医師となり、ハンセン病の治療に人生を捧げました。

智恵さんの絵が、林竹治郎の指導を受けたかもしれないと思うと、また違う価値が生

まれるような気がします。おそらく、先生からとても褒められたのでしょう。卒業証書と一緒に丸め、戦時中は聖書や英語の教科書とともに実家の屋根裏で大切に保管されていたそうです。

この戦争は負けます

記念館に保管されている昭和初期の個人的なアルバムに、持ち主の知人として、偶然にも智恵さんの家族写真を見つけました。

この写真を見ながら、廸子さんは、42歳の若さでこの世を去った母の生涯や思い出を語ってくださいました。



左から智恵さんと廸子さん、祖母のイワさん

栗山町で生まれ育った智恵さんは、モンク校長時代の北星女学校で学ぶ寄宿生でした。学校から米国留学を勧められるほど熱心に英語を学んでいましたが、商家の長女としての立場を考えて、留学を断念しました。

1933年に結婚し、満州の馬政局に勤めることになった夫と幼い子を抱えて海を渡り、日本に引き揚げて来たの

は、1946年9月のことでした。

廸子さんによると、「戦時中、母はよく、新聞もラジオも嘘ばかり。日本にこんな力はない。この戦争は負けると言っていました」。多感な学生時代に宣教師から聖書を学び、英語力を高める指導を受けた世代です。日本の枠を超えた視点で、冷静に時局を読むことができたのでしょうか。

戦後、パンを焼くとき、エバンス先生からドライイーストの代わりにジャガイモで天然酵母の作り方を教わっており、卒業後も宣教師と深くつながっていたことがわかります。「プロテスタントの北星は、気持ちに神様がいるからいいのよ」が智恵さんの口癖だったそうです。